

主 題：この世と神のどちらを愛するか？ 2

聖書箇所：ヤコブの手紙 4章7－10節

神が私たちを愛してくださるように神を愛することができれば…、なぜ、私たちはそれができないのでしょうか？神は純粋な愛で私たちを愛してくださっていますが、私たちの神に対する愛はそれに比較することもできません。すぐに神以外のものに心や目を奪われてしまいます。どうすれば神を愛することができるのでしょうか？どうすれば、神が愛してくださったように私たちはこの偉大な主を愛することができるのでしょうか？そのことをヤコブは私たちに教え続けてくれるのです。私たちの問題がどこにあるのか、彼はそのことを前回教えてくれました。私たちはどうしてもこの世の中を愛するのです。このサタンの支配している、神の敵であるこの世に、私たちはどうしても心が惹かれてしまいます。それがどれほど神を悲しませることであるかということを私たちは頭で分かっているが、残念ながらそれを選択し続けているのです。同時に、私たちには大きなプライドがあります。問題がなければ私たちは神を必要としないのです。このようなところに原因があることをヤコブは私たちに教えてくれました。この世を愛し、神よりも自分の力や知恵に過信して生きている私たち、そこに問題があり、そして、間違いなく神は私たちのそのような愚かな不信仰な歩みに対して心を痛めておられるはずで、神と自分のどちらを喜ばせるのか、このことは私たちが考え続けなければいけないことです。

ヤコブは「戦う欲望があなたたちのうちにある」と1節で言いました。まさに、ここに私たちの大きな問題があるのです。私たちの心の中には神に喜ばれることをして行きたいという思いと、かつての救われる前のように自分の思うとおりに生きて行きたいという、その戦いが私たちの心の中にあるのです。パウロがローマ7章で私たちに語ったとおりです。なぜ、私たちはこのみことばを通して繰り返し「神を愛するように」と神から命じられるのでしょうか？なぜ神は私たちに「あなたの心を尽くして神である主を愛せよ」と教え続けてくださるのでしょうか？神以外のものでなく、神だけを心から愛するようにと…。聖書にはその答えがあります。私たちがこの地上においても、永遠においても、神の祝福をいただいて幸せな者として生きて行くためです。幸せのカギはどこにあるのか、みことばは教えてくれます。私たちが心から神だけを愛して歩んで行くことです。神は私たちを変えて行こうと私たちのうちに働きを始められました。私たちをイエスに似たものへと変えて行こうとする、その働きを神は私たちのうちにもう始めてくださったのです。その結果、私たちはこのような人になって行きます。たとえば、対人関係においては、私たちは当然、人を愛する者になります。実は非常に難しいことです。しかし、キリストが私たちを愛してくださったことを知った私たちは、その愛によって人を愛する者に神が変えて行ってくださるのです。私たちは人をそのまま受け入れて人の過ちを許すことができない者ですが、神が私たちのうちに働かれ私たちを変えて行ってくださるなら、私たちはその人を受け入れ過ちを許すという寛容な人物になって行きます。人への思いやりに欠ける私たちですが、神が働かれるなら、私たちは親切な人を思いやる人物に変えられて行きます。人に対して偏見をもってしまう私たちですが、神が働かれるなら私たちは善意をもって人に接するような者に変えられて行きます。神が私たちのうちに働かれるなら、私たちは真面目で真心をもって誠実な者として人に接して行くことができます。なかなか優しくなれない私たちは神が働かれることによって、優しく穏やかな態度をもって接することができる柔和な者に神は変えて行ってくださるのです。そして、自分で自分の欲望や感情を抑えることのできる自制心をもった者に変えて行ってくださる、このように神は私たちのうちに働き、このような者へと神は私たちを変えて行ってくださるのです。キリストに似た者といったとき、余りにも漠然としています。しかし、聖書を見るとこのような者へと神は変えて行ってくださるということが明らかです。なぜなら、このような愛においても、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制においても完璧だった人はイエス・キリストだからです。また、私たちは自分自身でも、いつも神の喜びを持ち、いつも神の平安を持ち、そして、私たちはどんなときでも満足をもって生きて行くような、そのような者に神は変えて行ってくださるのです。不平不満を言うのではなく、与えられているものに感謝し、置かれている状況に感謝し、いつでも神を見上げて信頼を置くような、そのような者に変えようとしてくださっているのです。そして、それは地上だけのことではありません。私たちがイエス・キリストにお会いしたとき、神は私たちにすばらしい祝福を約束してくださっています。

神はこのような働きを私たちのうちにしてくださっているのに、なぜ、私たちは変わって来ないのでしょうか？問題は罪です。神の働きを妨げる罪があるからです。パウロは信仰の戦いに関して、スポーツにたとえてそのことを話しています。I コリント9：24－25「競技場で走る人たちは、みな走っても、

賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。:25 また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、**私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。**」、パウロは競技者が受ける冠はいずれ朽ちるものだが、信仰の歩みを戦っている私たちはそのような朽ちるものではない、枯れたり錆付いたりしない、永遠に価値のある朽ちない冠を得るために一生懸命そうするのだと言います。パウロ自身も神を愛することを願いとしてそのような歩みを続けたのです。それは簡単なことでないことは皆さんご存じです。パウロはあきらめないでそのように歩み続けました。私たちも神を心から愛する者へと変えられて行きます。そのために何をしなければいけないのか、そのことをヤコブは私たちに教えてくれるのです。私たちは神を愛する思いをもっている、と同時にまた、罪を愛するというこのような戦いの中であって、葛藤の中であって、私たちはどのようにしてその誘惑に打ち勝って行くことができるのでしょうか？ 今日、7－10節のみことばを通してヤコブが教えてくれる四つのことを見て行きます。

☆どうすれば神を心から愛する者に変えられ、罪との戦いに勝利できるのか？

1. 従順に生き続けて行くこと 7節

「**ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。**」、神に対して従順に生き続けて行くこと、そのことをヤコブは教えるのです。この7－10節の中には10個の命令があります。このようにしなさいとヤコブは教えてくれるのですが、その一つ目がここに出て来ます、「**神に従いなさい**」と。これは軍隊の用語で「だれかの下に自分の位を置く」という意味をもったことばです。位の高い兵士のもとに自らを置くことです。しかも、それを自ら進んで行なうようにとヤコブは言います。ヤコブはここで、神があなたの主人なのだから、神があなたの隊長なのだから、その方に従って行くようにと言います。次にヤコブは「**悪魔に立ち向かいなさい**」と続けます。これも命令です。これは反対して立つ、反抗する、そういう立場を取るということです。そして、「従いなさい」も「立ち向かいなさい」もどちらも、すぐにその行動を起こしなさいという、行動の緊急性、重要性を意味する時制をヤコブは使っています。ヤコブが言いたいことは、今すぐにそれを行わなければいけないということです。たとえば、今私たちが弾がびゅんびゅん飛んで来るような戦時下にいるなら、自分の身の安全のために今すぐ行動を起こします。だから、緊急を要するものだと言っているのです。なぜなら、今私たちは戦いの中にいるからです。私たちの心の中には、神に従って行きたいとする思いとそうでない思いとが交錯するからです。そのような戦いの中に今いるから、このような選択を今しなければいけないということです。神の前に正しい選択、それはどんなことがあっても神に従い続けて行くこうという選択です。

でも、それだけではありません。私たちを誘惑する悪魔、サタンに対してNOと言いつけることです。ペテロはこのように教えました。I ペテロ5：8－9「**身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。:9 堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。**」、サタンはクリスチャンが神に従って行かないようにと働くのです。私たちはイエス・キリストを信じる前はそうでした。悪魔の様々な誘惑を受け、神に従いたくないとの選択をしていました。もちろん、サタンだけがすべてを為すわけではありません。私たちのうちに罪という原因があるからです。それはヤコブが私たちにすでに教えてくれたことです。「サタン」とはこのように訳されます。反対者、敵、だます者とか悪口を言う者、中傷する者、告発する者、告訴する者、責める者、非難する、そのような意味があります。あたかもこれが真実であるかのようにだまし続けようとするのです。神を無視した神に逆らう生き方こそが正しいかのようにだまし続けるのです。サタンは私たちが神に従って行かないようにだまし続けると言うのです。

私たちの信仰生活においてどうでしょう？神のみことばを聞き、神のみこころが示された、心の中ではそれをして行かなければいけないという思いと、したくないという思いがあり、そして、したくないという思いが勝ってしまうと、私たちはいろいろな問題に遭遇して行きます。どうして私はこんな罪の中に陥ってしまったのだろうとよく考えてみると、落ちたところは、神に従いたくないというその思いがきっかけだったと…。私たちがこのような思いを持っているなら、サタンに機会を与えてしまうのです。サタンはそのような機会を捜し求めているからです。だからペテロが言うように、油断してはならないのです。身を慎み、目をさましていなさいと言ったのはそういうことです。

ヤコブは教えてくれます。私たちが神に従う選択と私たちを誘惑する悪魔に対してもNOと言いつけることが必要だと、そして、「**そうすれば、**」と続きその結果が言われます。「**悪魔はあなたがたから逃げ去ります。**」と、これは未来のことです。誘惑から解放される、あなたは勝利できると言うのです。神を愛する者へと歩んで行くことができると。神の前に正しい選択をし、そのように行ない始めて行くことです。悪魔もこのように生きる者にはどうすることもできないのです。悪魔は全能ではないから、私たち

クリスチャンが正しい選択してそのように歩んで行くなら、私たちは勝利をもって生きて行くことができます。そのためには条件がありました。命令形のあとに未来形が続く文型は条件節を表わします。このように生きるなら結果としてこのようなことが起こると…、ヤコブはそうように教えるのです。

2. 神の臨在を覚え続けること 8 節

神の目を常に意識しながら生きて行くことです。8 節「**神に近づきなさい。**」とこれも命令です。旧約聖書の 70 人訳（ヘブライ語のギリシャ語訳）では、この「近づく」は祭司がいけにえをささげるとか、宮の中で奉仕を為すこととして用いられています。旧約の時代、祭司は奉仕をするときに神に近づいたのです。今イエス・キリストを信じる私たちを神は「あなたは祭司」と呼んでくださるのです。私たちは祭司として赦しや清めを求めて神に近づくことができるのです。かつては、祭司、大祭司しか神に近づくことはできなかったのですが、今私たちは神の前に出て行くことができるのです。私たちは神の臨在の中を生きているのです。私たちは神を逃れてどこにも行けないのです。常に神の目が自分に注がれているのです。私たちはそのことを忘れてはならないのです。詩篇の著者はこのように言います。73 : 28 **「しかし私にとっては、神の近くにいたことが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語りあげましょう。」**、神との密接な交わり、神との親しい交わりが本当の幸せをもたらしてくれるのです。私たちはいつも神との交わりを求めることが大切です。ちょうど、家族の関係のようです。神は常に私たちクリスチャンと交わりを持とうと願っておられます。問題は私たちの側にあるのです。私たちがそれを拒むからです。アダムとエバが最初に罪を犯したときのこと、創世記 3 章に出て来ます。3 : 8 - 10 にこのように記されています。**「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。」**、神の声を聞いたこの二人は何をしたのでしょうか？**「それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。：9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。『あなたは、どこにいるのか。』：10 彼は答えた。『私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。』**、これが人類最初の罪です。罪は私たちが神から離れさせようとするのです。神から身を隠そうとするのです。罪を犯した彼らはそれまでもっていた神との親しい交わりを放棄して神から隠れようとしたのです。これが罪のなすわざです。神など必要としないのです。ですから気をつけなければいけないのです。神のところに答えを求めて行くよりも、神のところに知恵を求めて行くよりも、神のところにみこころを求めて行くよりも、人のところに行く時は危険があるのです。その人が本当にみこころに従った知恵のある人で、みことばに従って教えてくれるなら良いのですが、人間の知恵をもって答える人であるなら違う方向に進んでしまう可能性があるのです。神の前に正しく生きている人は神との交わりを楽しみます。神との時間を喜びとします。しかし、それを妨げるものが存在します。罪が神とあなたとの間に距離を置こうとします。罪があなたに神に背を向けるようにと働くのです。もし、あなたが自らの意志で神との交わりを持とうとするならどうなるでしょう？その結果が記されています。**「そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」**と、ここにも命令形と未来形で記されています。つまり、あなたは神との親しい交わりを持つことができるが、そのためにあなたは「神に近づく」選択をしなければいけないのです。それには、常に神の臨在のもとに生きていることを覚えることです。それによって、私たちは自らの行動に注意を払うからです。

3. きよく生き続けること 8 - 9 節

8 節の後半にはこのようにあります。**「罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。」**、ヤコブは悔い改めを勧めているのです。クリスチャンは神との親しい交わりを許された者です。これはクリスチャンに与えられた特権です。いつでもこの偉大な神と交わることができるのです。でも実際は、こんなすばらしい特権に与っていながら私たちは神に逆らうことを繰り返しています。ヤコブは「**罪ある人たち**」とか「**二心の人たち**」という呼び方をしました。的はずした生き方をしている「罪ある人たち」、神のみこころから外れてしまう、そのような歩みをしている人たちです。「二心の人たち」、これは言っていることと行なっていることの異なる人たちです。偽善者のことです。そのことについてヤコブは何度か私たちに教えてくれています。たとえば、1 : 6 - 8 を見ると**「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。：7 そういう人は、主から何かをいただけたと思ってはなりません。：8 そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。」**、二心のある人は神の言われていることをなかなか信じることができない、すぐに疑ってしまう人のことです。1 : 19 - 2 : 26 を見ると、そこには聞いたことを実行しない、みことばを聞いているだけでそれを実行しない人の問題です。3 : 9 - 10 には**「私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。：10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。」**、同じ口から賛美とのろいが出てくると二枚舌のことが言われています。そのようなことがあってはならないと。3 : 15 には**「そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。」**とあり、この知恵とは人

に対する「ねたみ」です。神の知恵をいただいてその知恵を語っていながら、世の知恵によって、悪霊に属する知恵によって人をねたむのです。4：1－2には互いの間にいろいろな激しい論争があると言います。「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。：2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。」と、このような論争が起こるのは自分を優先するからです。4：4には「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と、神を愛すると言いながら世を愛してしまっている、まさに二心のある人です。

このようなことを言った上でヤコブは読者たちに、また私たちに命じます。罪から離れなさいと。神に近づくにはきよくなければならないと言います。そこで彼は「手を洗いきよめなさい。」「心を清くしなさい。」と言います。きよめることです。確かに、旧約聖書の出エジプト30章などを見たとき、祭司がいけにえをささげたり、会見の天幕に入るときは手や足を洗いなさいという命令がなされています。ユダヤ人の儀式的な規定が記されています。そのように身をきよめてから神のわざを為しなさいと言うのです。でも、それだけでないことがここに書かれています。そういう外側をきよめるだけでない、もっと大切なことはその人の心をきよめることだと。なぜなら、心というのはその人の感情、理性、意志の源だからです。そこをきよめなければいけないのです。私たちの行動はそこから出てくるからです。なぜ罪を犯すのか、罪を犯したいからです。なぜ神に逆らうのか、神に逆らって生きたいから、自分のしたいことをやりたいからです。その選択は自分の心から出てくる、だからそこをきよめなければいけないのです。ヤコブはここで罪から離れて自分をきよめなさいと言います。

そして、本当にきよめた人、本当に悔い改めた人のその特徴が9節にあります。「あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。」とここにも三つの命令が出て来ます。「苦しみなさい」とは、みじめになる、みじめに感じることです。ヤコブは、もしあなたが自分自身を神の目で見るときみじめに思えてくるということを言っているのです。というのは、自分の心の中の罪が見えるからです。そして、何とか自分の努力でそれを改善しようとしてもそれは変わってこないのです。パウロはローマ7：24で「私は、ほんとうにみじめな人間です。」と言いましたが、なぜこのように言ったのでしょうか？彼は自分のことを正しく見たからです。神が自分を見るように見たのです。そのとき自分の罪深さが明確になったのです。ヤコブはこのことを言っているのです。苦しみなさいと。あなたは神が見るように自分を見るなら、いかにみじめな罪人であるかということに気づくからと。そして、「悲しみなさい。」と言います。自分のみじめさが分かると心の中には悲しみが湧いてきます。なぜなら、こんなに神は私を愛してくださっているのに私は神に逆らい続けている現実を見ると、私たちの心は悲しむのです。そして三つ目に「泣きなさい。」と涙を流すのです。これは悲しみの表現です。どれほど自分は神を悲しませているか、それを覚えるとき私たちはその悲しみが涙となって表われてくると言うのです。これがほんとうに悔い改めた人の姿です。罪を軽く見ていません。神がご覧になるように見て、自分がいかに汚れた者であり、いかに救われる資格のない者であり、神の前に立つ価値のない者であるかと。

そして、次に「あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。」と続きます。ここにもまた命令が出てきました。笑いを悲しみに変えなさいと。神は神が与えてくださる喜びをもって笑ってはならないと言っているのではありません。この「笑い」とは新約聖書にはここにしか出てこないことばです。これは神を拒む愚か者の笑いのことです。罪を真剣に考えない者の笑い、この世のことしか考えない、永遠のことなど考えない、そのような人の笑いなのです。イエスはルカ6：25でこのように言われました。「いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。」と。「食べ飽きている」とはこのような人です。自分の欲しいものはすべて手に入れた、自分には欠けるところが何一つない、だから、神など私には必要でないと、そういった思いをもっている人のことです。最初に見たように、非常なプライドがあるのです。イエスは言われました。後になればそれが大きな間違いであったことに気づくと。ヤコブは神よりも世を愛しているクリスチャンに対して、「あなたがたの笑い」と「あなたがたの」を強調しています。つまり、ヤコブはイエスを信じている読者の中で、神を純粹に愛するのではなく、この世に目を心を向けて世を愛している、罪を愛しているクリスチャンたちに対して、このメッセージはあなたへのメッセージだと言うのです。そして、この世から得る「笑い」というのは一時的なものでしかないということを言うのです。伝道者の書7：6を見ると「愚かな者の笑いは、なべの下のいばらがはじける音に似ている。これもまた、むなししい。」とあります。これは一種のことば遊びですが、この「いばら」ということばと「なべ」ということばは、「なべ」の総数が「いばら」です、複数形になっているのです。これはなべの下にいばらをくべて調理をすることです。しかし、この古代中東においては、普通は木をく

べるのではなくて燃料は牛の糞でした。そのような生活をしていた人たちに対して「いばら」をくべるというのは、長く続かないということです。「いばら」ははじけてすぐに火が点くけれどすぐに消えてしまうからです。この世がもたらす喜びは一時的であつという間に消えてしまうものだということを言っているのです。その空しさというものを伝えようとしたのです。ですから、罪がもたらす偽りの喜びからあなたは悔い改めるように、それは永続するものではないと言うのです。

若くして信仰をもった人はこのように思ったことはないでしょうか？もう少し年を取ってから信仰をもてばよかった、自分のやりたいことを皆やってから信じればよかった、天国へも行けるしと、愚かにも私たちが考えた理想的な生涯というのは、自分の好きなことをして死ぬ間際にイエスを信じて天国に行くと、それがベストだと…、見事に悪魔の嘘にだまされているのです。神を離れたところに本当に幸せはないのです。愚かにも私たちは神の前にどのように生きて行くのかが分からないから、一生懸命生きているつもりなのに、そこに喜びがない、幸せがない、神が約束されたけれど私にはそれらが与えられないと、周りを見たとき楽しそうな人たちがいっぱいいる、そして、そのような生き方に憧れてしまい、ああいう生き方もいいのでは？こんなふうに生きるのもいいのでは？みんな楽しそうだと、このようにして私たちは誘惑の中に陥ってしまうのです。私たちが気づくべきことは、この世がもたらすもの、罪がもたらす喜びは一時的なものだということです。神だけが永続する喜びを、本当の幸せを私たちに与えてくれるのです。でも残念なことに現実には、多くのクリスチャンたちがこのような罪の中を歩んでいます。一人の神学者がこのように言っています。「献身的なキリスト者も罪に対して安易な態度に陥ってしまうことがある。それは恐らく、神の赦しとあわれみのご性質に余りにもつけ上がっているからであろう」と。つまり、神の恵み、あわれみだけが強調されて行くとき、どのような生き方が生まれてくるかという、何をしても神は赦してくれるのだから好きなように生きたら良い、天国に行くことも決まっているのだから…となります。しかし、聖書はそのようなことを教えてはいません。私たちはしっかり覚えなければいけません。自分が種を蒔けば刈り取るのです。私たちはみな神の前に立つのです。自分の選択したことに責任があるのは自分にです。だから、私たちが覚えることは、今日神の前に正しく生きて行こうとする、明日を神がくださるなら明日も正しく生きて行こうとすることです。

ヤコブはこのように世の中がもたらす一時的な笑いを悲しみに変えなさい、喜びを憂いに変えなさい、そういうものは空しいのだ、そのことに気付くようにと言うのです。

4. 神をより深く知って行くこと 10節

「**主の御前でへりくだりなさい。**」とここにも命令が出て来ます。あなたがへりくだるのです。そのことをこのみことばは私たちに教えているのです。霊的に弱く価値のない存在であることを私たちは悲しみ、そのことを神の前に悔いて、そして、神の前に謙虚にへりくだって行くようにと言います。実はこのことをヤコブはこのみことばを通して教えたかったのです。7-10節を通して彼が言いたかった結論はここにあるのです。私たちが本当に神の前にへりくだる者、神の前に謙虚になるには、この方がどんなに偉大な方であるかということ覚えなければならぬのです。神がどんなにすごい方であるかが分かれば、同時に、私たちは自分がいかに罪深い者であるかが分かってきます。そうすると私たちは神に対する指図がなくなってきます。神さま、こうしてください、ああしてください、こうした方がいいですよなど、恐れ多くて言うことができません。神の偉大さが分かると自分の本当の姿が見えて来るのです。それができたら「**そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。**」と、また未来形が続きます。神の前に謙虚になったことの結果です。そういう者を神が祝福してくださると。この「**高くしてくださいます。**」を辞書で引くと、位、品位、幸福度を高めるという訳がされています。神は私たちを益々幸せにしてくれる、この地上にあっても、と言うのです。私たちは自らの愚かさ、罪深さを知って、同時に神の助けが必要であることをしっかりと覚えて、神の助けをいただきながら生きて行くことが必要です。

今日、私たちはこのように四つのことを見てきました。このようなことが私たちに勝利を与えてくれると…。常に従順であること、いつも神の臨在を覚えて神との親しい交わりを持ち続けて行く、きよさを求めて行くこと、そして、神をより深く知って行くこと。皆さん、今から話すことが今日の中でもっとも大切なことですから、もらさないでください。これらの教えを聞いて私たちは、分かりました、そのようにやって行きます、頑張ります、と、このようには神は決して私たちに望んでいないということです。私たちの信仰において失敗するところは、神が命じておられることをやりたいとすることはいいのです、やって行こうと決心することも正しいことですが、それを自分の力でやろうとすることが問題なのです。4：6を見てください。「**しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。…**」と、つまり、神がそれを実践させてくださると言うのです。恵みによって生きるのです。4～5世紀に渡って生きたアウグスティヌスという信仰者はこのようなことを言っています。「神の命令は神の可能性である、神の要求するものを神は与える」と。ここに私たちがしっかり目を留めると、クリスチャン生活は喜び

にあふれるのです。希望にあふれるのです。なぜなら、神の命令は私たちにとって重荷ではないのです。神がそれをさせてくれるから。必要なことは、神のみこころをこうして教えられたときに、神さま、私はそのように生きて行きますという選択をすること、そして、神さま、あなたの恵みによってそれを実践させてくださいと願うことです。そのとき、神がそれをなさしめてくださる、その力を神がくださる、このようにして私たちは生きて行くのです。そのことが分らないと、これらの命令はあなたにとって重荷となります。すごい神です。私たちのことをだれよりも分かっておられる、私たちを変えようとしてくださっている、愛をもって神を愛して行けるような者に私たちを変えようとしてくださる、そのためには、みこころを知り、神の恵みによって実践することです。そのように生きて行きましょう。そのときに、神がご自身のみわざをあなたや私のうちに為してく下さるのです。